



かさまつの子

笠松町道徳教育連絡会議



視覚障害のかたから学ぶ

子どもたちが皆、固唾をのんで見守ります。素早い手つきでなめらかに、りんこの皮がむかれていきます。「わあ。」「ふうむ。」「教室いっぱい自然と拍手の渦が沸いていきます。」

これは、本校六年生の総合的な学習の時間「まつ子タイム」の学習の様子です。本校六年生は、まつ子タイムで福祉を柱に、『思いやりのある住みよい松枝』をテーマに学習を展開しています。本年度の学習課題を設定するにあたって、まず、町社会福祉協議会にお願いし、第一回の障害者との交流の時間をもちました。視覚障害をもつ

かたに、日常生活における様々な疑問を投げかけました。「毎日の食事、特に料理はどうしていますか?」の子どもたちの問いに、りんこの皮むきを手もたの前で披露してくださいました。「僕、やったことない」という男子の声。子どもたちのほとんどは、「視力がないから当然できないだろう」という意識が強くありました。ところが、ナイフを手に取り、流ちょうにりんこの皮をむく視覚障害のかたの姿を目の当たりにして少し意識が変わってきたようです。特にこの障害のかたは、不慮の事故で、突然に視力を失うこと

となりました。「視力がはつきりとある時に、こうした経験を積んでいたのだから、自分の手の感覚で切っていきます。自分の手が記憶をしています」とおっしゃいました。体験や経験の大切さを身をもって感じました。

この学習を終えてから、子どもたちは、給食の時間に目を閉じて食事をしてみたり、後片付けをしてみたりと、自ら視覚障害のかたの生活に近づこうようなことを試していました。この視覚障害のかたとの出会いで、子どもたちは次のような思いをもちました。

高島さんは、とても明るくて、私だったら、とうていできないなと思うことがたくさんありました。目の見えない人への印象が変わりました。視力が悪い分、人一倍手先が器用なんだなあ。僕が目が見えなくなったらパニックを起こしそうだ。目が見えなくなると、失ったものより得たものの方が多いなんて、信じられませんでした。

六年生のまつ子たちが、この学習を通して、「障害をもつ人たちに何かをしてあげる」ではなく、互いに個性をもつ人という認識で、共に生きるという見方や考え方ができることを願っています。

松枝小学校 教頭 井深 智子



教育委員会だより

教育電話相談

「悩んだら気楽に
電話してください」
郡四町教育委員会
☎245・1133

「荷物はいっぱい持つと大変だけど、「身につけたこと」はどれだけあっても重たくないで、がんばりゃあよ」とおぼあちゃんがよく言っていました。

「身につく」ということは、「確かに自分の力になっていて、いつでも引き出して使える知恵や知識、技術や能力になっている」ということだと思えます。

近年「体験活動」の重要性がクローズアップされています。「確かな学力」、「生きる力」の育成には、「体験活動が有効だ」と言われます。どうしてなのでしょう。

・失敗 工夫 成功の繰り返しがある
・理論と実際の違いが体感できる

・五感全てが使える
・自分がやらなければできない不安、不足、不便、不測などの状況乗り越える工夫が必要になる
などではないかと思えます。つまり自分で考えて、

「身につく」ということ

工夫して、汗を流して解決することが重要なのです。これによって切り開いていく力が「身につく」のです。さて、体験活動はどんなところに気を付けて、活動させたらよいのでしょうか。

- ・「目を離すな、手を離せ」
- ・教えること、任せること、考えさせることをはっきりさせる
- ・一人ひとりが責任を持つ場、内容、時間を作る
- ・仲間と協力する場を設定する
- ・安全確認は十分行い、緊急対応体制を明確にする
- ・などに配慮し、できるだけ丸ごとの体験をさせて鍛えてやってください。

体験がいつばいできる「夏休み」がもう目の前です。子どもたちについていっばい体験をさせて、見届け、変容ぶりをほめてやってください。